

第1章 「学校に行けない子」と「仕事に行かなければならない親」

エピソード1 ーIT企業勤務、加藤ミキさん（仮名43歳）の告白

その日、ミキさんは、翌朝午前10時からの重要なクライアントへのプレゼンに向けて、深夜まで資料を作成していた。彼女は都内ーIT企業でプロジェクトマネージャーを務めている。入社以来、組織のなかで誰よりも働き、実績を積み上げてきたことに誇りをもっている。数力月前には、社内で注目されている新規プロジェクトのリーダーに抜擢されたばかり。43歳、まさにキャリアの絶頂期を迎えていた。

異変が起きたのはプレゼン当日の朝、7時30分だった。中学1年生の長男、悠真（ゆうま）くんがパジャマのままリビングのソファで膝を抱えて丸まっていた。

「悠真、もう着替えないと遅れちゃうよ、どうしたの？」ミキさんの声掛けに、悠真くんの返事はない。

膝を抱えたまま小さな声で「おなか痛い、学校に行きたくない」

「え、また？」と、言いかけて言葉を飲み込んだ。ここ3週間、月曜日になると体調不良を訴えていた。学校にはその都度連絡し、担任の先生とも話をしてきた。長男には特に変わった様子もなく、登校が嫌になる理由は見当たらないという。いじめの可能性も考えにくく、勉強についていけない事実もない。

担任の先生は、「しばらく様子を見ましよう」と言われるばかりだった。

職場に、遅刻をする旨連絡し、登校に付き添ったり、遅れて登校させたりしていた。しかし、今日は外せないプレゼンがある。ミキさんの頭のなかではクライアントの顔、上司の期待する顔、長男の青白い顔がぐるぐる回っていた。

「今日だけ、頑張れない？ お母さん、大事なプレゼンがあるの。それが終わったら、急いで帰ってくるから。」無意識のうちにミキさんの口調はきつくなっていた。悠真くんがさらに体を丸め「つらい」とつぶやいた瞬間、ミキさんの心のなかに言葉にできない喪失感が漂った。

「私は、自分の仕事と、子どもを天秤にかけているのか？」結局、その日のプレゼンは同僚に代わってもらった。会社で電話を入れ、「子どもの体調不良で・・・」と告げたときの受話器の向こうから伝わってくる無言の「今日もか」という空気。上司の「お大事に、

次は頼むよ、期待しているんだから」という同情からくる、よそよそしく刺さる言葉。それは彼女が大学を卒業し、20年かけて築き上げてきたキャリアと「仕事への情熱と信頼」が、砂の城のようにもろくも崩れ始めた瞬間だった。この日から、ミキさんの「不登校離職」へのカウントダウンが始まったのである。

「夫婦間の温度差」父親の「甘やかしている」という言葉の正体

母親の「なぜ私ばかりが、キャリアを削って家庭の穴を埋めなければならないのか」という問いは、現代の共働き世帯が直面する、最も孤独で鋭い痛みでもあります。

特に、子どもの不登校という非常事態において、夫婦間に横たわる「役割」ジェンダー構造がもたらす葛藤についてここで整理します。

よく耳にすることですが、父親が発する「甘やかし」という指摘は、単なる意見の相違ではなく、「現状維持への執着」と「理解不足による防衛反応」であることが多いです。

「原因」を自分以外に求めたい心理が働くと、子どもの問題を「母親の育て方（甘やかし）」に帰属させることで、自分（父親）のかかわり方や家庭環境の責任から目をそらすことができます。

第3章で述べますが、「学校＝絶対行くもの」という価値観への固執から、多くの男性にとって、社会的なルールから外れることは不安そのものです。その不安を直視できないため、「厳しくすれば戻るはずだ」という短絡的な解決策に逃げてしまう場合もあります。もちろん、そうでない場合もありますから、決めつけるわけにはいきません。

ケア労働の過小評価をしている場合もあります。不登校に伴う「付き添い」「昼食の準備」「情緒の安定」といった膨大なケア労働を「誰かがやらなければならない仕事」として認識していません。ましてや、父親が「自分の役割」と認識している場合は多くありません。「やらなければ」「母親にばかり押し付けて申し訳ない」そう思っている、仕事を優先する気持ちが勝り、葛藤を抱えながら妻（母親）がケアしてくれることに甘えている、という生活が続いていることもあります。

1 なぜ離職を検討するのは「私」なのか（ジェンダー的葛藤）

「なぜ私だけが？」という憤りの背景には、日本の社会構造に深く根ざした「無意識の役割分担」があります。

①「稼ぎ」の多寡によるパワーバランス

統計的に、男女の賃金格差がある以上、「収入が低い方のキャリアを犠牲にするのが経済的に合理的」という力学が働きます。しかし、これは個人の能力ではなく、社会構造が生んだ格差です。その「合理的判断」の名の下に、女性の自己実現や将来の年金受給権までもが奪われていきます。

②会社側の「家庭への理解」の性差

男性…「子どもの不登校で休みます」と言うと、上司から「奥さんはどうしたの?」と聞かれることがあるそうです。子どものケアは「母親」という認知が、根強くあることがうかがえます。

女性…「子どものことなら母親が対応して当然」という周囲の（残酷なまでの）期待。この「男性は仕事に専念すべき」という社会的圧力が、夫（父親）を家庭から遠ざけ、妻（母親）を家庭に縛り付けます。

図表 1 離職リスクと探索

視点	離職のリスク	継続への模索
経済的	自分の自由になるお金、老後の資金が減少する	経済的自立を維持し、家庭内での発言力を守る
精神的	24 時間子どもと向き合い、社会から孤立する恐れ	仕事が「家庭以外の自分」でいられる避難所になる
夫婦関係	「夫の収入が多い」という負い目が生じやすくなる	対等なパートナーとして負担の再配分を要求し続ける

③「母親Ⅱ最後の砦」という呪縛

「子どもに何かあったとき、最後に責任を取るのは母親である」という神話、社会風潮が妻（母親）にも、そして夫（父親）の心のなかにも深く刷り込まれています。そのため、夫（父親）が対応しない分、妻（母親）が「私が仕事を辞めなければ、この子はどうなるの？」という究極の選択を迫られることになります。

葛藤の先にある「自分を守る」という視点

この状況で最も危険なのは、「私が仕事を辞めれば、すべて丸く収まる」と自分を納得させてしまうことです。まず、選択するにあたって、経済的・精神的・夫婦関係の3つの視点から「離職のリスク」と仕事「継続への模索」を考える必要があります。これらをまとめたものが次の図表1になります。